

『判決の谷』(ヨエル書 3章 1-21節) 2021.5.16.

<はじめに> 物語がどんな終わり方を迎えるのかは、とても興味深いことです。今の状況と過去の出来事が今後どのように展開し、どう終結させるのかは、脚本家の真骨頂です。「主の日」は聖書が描くこの世界の結末の描写で、私たちはやがて来るその日をそこから垣間見ることができます。

I 預言者ヨエルが描くもの

①ヨエルの時代の出来事(1-2章)

預言者ヨエルの時代に起こったイナゴ・バッタによる災禍と荒廃(1:1-2:11)は、イスラエルの民が主に立ち返る祈りへと向かわせます。主はそれに答えて救いと回復を与え(2:12-25)、彼らは主がともにおられることを知り(2:26-27)、主の霊を注がれる(2:28-29)と約束されました。

②やがて来る主の日(3章)

2章までで一応の終結が描かれ、当事者は安堵を得るでしょう。しかしヨエルは3章を記しています。彼らが経験した災禍と回復は、後に来る主の日の予表・しるしだと描かれています。この箇所には地名が列挙されて、イスラエルを囲む当時の諸国が出て来ます。

③地図を片手に

ツロとシドン、ペリシテ(4)は地中海沿岸、エジプトとエドム(19)は南方の隣接国です。ギリシア(6)、シェバ(8・サウジアラビア辺り)は当時の東西の遠国です。3章には3つの鍵括弧で主のことが記されていて、イスラエルを含む諸国に及ぶ主の日を告げ知らせます。

II 主のことば

①略奪と離散(1-8)

イスラエルの富と神殿の財宝は国々が略奪し、民は諸国に売り渡されて離散、その地は彼らで分割占有します。イスラエルの歴史を俯瞰しているかのような描写です。しかし、主は彼らを回復し、敵対する者の頭上に報復とさばきを下されるのが主の日です。

②周辺諸国への挑戦(9-12)

その日に向けて、周辺諸国はエルサレムに集められます。「聖戦を布告せよ」は諸国が主に逆らい立つ義憤の表れです。その動きにヨエルは主の軍勢の加勢を呼び求めます(11)。ヨシャファテの谷(2,12)はエルサレムとオリーブ山の間のキデロンの谷と見られます。

③主はシオンに住む(17-21)

第3の主のことばはイスラエルに向けてです。彼らを虐げた諸国は、その暴虐と血の報いとして荒れ廃れます(19)。ユダとエルサレムの山や丘は水が流れ、豊穡の地となり、人々が住みつき(18,20)、エルサレムが主が住まわれる聖なる所となります(17,21)。

III ヨエルのメッセージ

①主は回復させる(1)

イスラエルは主を遠ざけ背いていたので、主は彼らに災禍を送られ、ご自身に立ち返るように促されます(2:12)。真実に応じ、悔い改める者をあわれみ(2:13-14)、主の御名を呼び求める者を救い(2:32)、回復させる御方です。主は背く者をねたむほど愛されます(2:18)。

②主は裁かれる(1-2,14)

主の民が回復されるその日、その時、そこに主に敵対する者も集められ、その場を判決の谷(14)として主が裁きの座に着かれます(2,12)。ヨシャファテは「主は裁かれる」の意です。主が人の行状の報いをその頭上に返されることを、厳粛に受け留めねばなりません。

③主を知るようになる(17)

「主を知る」は預言者が多用する表現です。知識や受け売りの情報ではなく、個人的な神体験です。主は今も生きておられ、全てを治め導かれる御方で、私たちとともに住まわれる、インマヌエルの主です。聖霊が注がれ、内に住まわれることがその成就です。

<おわりに> パウロが奥義と語った内住のキリスト(コロサイ 1:27)の実現を、ヨエルは遥かに望み見ました。これは私たちにはペンテコステで実現しています。同時に主の日が近いことを知り、自ら身を慎み、あわれみの主を呼び求めるように証しする務めが委ねられています。(H.M.)